

あ と が き

ここ東海村で一番好きな夜景がある。
動燃駆け上がり線を、西から東へ、海に向かって起伏のある道を進み、最後の坂を駆け上がる。両脇の建物で遮られていた視界が、緩やかに左から開かれると、核燃料工場、再処理工場の煙突群が、まるで大きなバースデーケーキのように飛び込んでくるのである。その夜景に、何故か帰ってきたなと感じながら、アクセルを離し自由落下にまかせて坂を下りると、右側は水田が開けており、夜の帳が地上まで侵食したようにポツカリと、人々の生活の境界を主張するように黒くえぐっている。遠く光る灯はピカピカと、夜空に輝く星のように見える。

前方の視界に、号令をかけたように無言で集まってくる家々の灯を見て、土木工学の先駆者 廣井勇博士の言葉を思う。

「もし工学が、唯に人生を繁雑にするのみのものならば、何の意味のないことである。これによって数日を要するところを数時間の距離に短縮し、一日の労役を一時間に止め、人をして静かに思惟せしめ、反省せしめ、神に帰る余裕を与えないものであるならば、我々の工学にはまったく意味を見出すことができない。」

(『工学博士 廣井勇伝』)

灯りの一つ一つに家庭があり、住まう人々の笑顔を思う時、その灯りのために自分の研究は、核データは何ができるのだろうか・・・

2011年2月某日 中村 詔司



日本原子力学会核データ部会
核データニュース編集小委員会

喜多尾憲助（元放医研）、井頭政之（東工大）、石川 眞（原子力機構）、
岩本 修（原子力機構）、中川庸雄（元原子力機構）、吉田 正（東京都市大学）、
渡辺幸信（九大）、山野直樹（福井大）、河野俊彦（LANL）、大塚直彦（IAEA）
中村詔司（委員長、原子力機構） [編集] 石橋貞子